

◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年5月号

テーマ『政府は必ず嘘をつく・
向田理髪店』

○：国際ジャーナリスト・堤未果著「政府は必ず嘘をつくー増補版」角川新書を読んだ。以前このニュースレターで取り上げた「沈みゆく大国アメリカ」二部作より前に発表されたものの増補版なのだが、書かれている内容は決して古くなってはいない。むしろ、その後の経過が指摘の正しさを証明しているようにさえ感じさせる。「政府は必ず嘘をつく」とはきついで表題で、政府を批判するだけの反対派の過激な主張か、と誤解されるかもしれないが、そうではなく、政府の言うこと、マスコミの伝えること、をキチンと嘘か真実か見分けることの大切さを訴えている。

○：アメリカでは上位1%の超富裕層が99%の人間に負担をすべて押し付けて異常な利益を手にするのことに對し、ウォール街でデモが行われた。想像を絶する資金力をつけた経済界が政治と癒着す

る「コーポラティズム」は、9・11テロをきっかけに加速し、大幅な規制緩和とあらゆる分野の市場化を実施し、この10年でアメリカの貧困層を3倍に拡大させた、と言われる。そして9・11大震災の後の日本が、アメリカと同じ歩みを辿っていることに驚く。9・11の後、政府とマスコミを信じすぎたせいで多くのものを失ってしまったアメリカの「失われた10年」のあちこちに、9・11大震災で多くのものを失い、先が見えない不安の中で前に進むためのヒントがちりばめられていると、この本は教えてくれる。それは、ヨーロッパで起きている金融危機や暴動と重なり合い、アラブや中東で起きている「革命」と呼ばれるものと根本を同じくし、イラクの末路や米韓FTA(自由貿易協定)、新しい価値観を手を道を開き始めた南米や、「TPP」の裏側にあるものの正体とつながり合い、私たちが

およそ「他人事」だと感じているものが9・11後の日本の近未来を鏡のように映し出していることを。

○：「政府は嘘をつくものです。ですから歴史は、偽りを理解し、政府が言うことを鵜呑みにせず判断するためにあるのです」というのは歴史学者、ハワード・ジンの言葉。イラク戦争の真つ只中、学生たちに繰り返し伝えたという。それは単なる政府批判ではなく、未来を創る際の選択肢を他人任せにするなという、メッセージだ。アルカイダとの関連も大量破壊兵器も全くないのに、フセインは9・11に関係している、大量破壊兵器を隠し持っている、として始められたイラク戦争。ブッシュ大統領はずっと後になってから「9・11テロとフセインは全く関係がなかった」と発言した。9・11後の日本政府も「ただちに健康に害はありません」「メルトダウン

はない」と発表。一号機、二号機、三号機のいずれもメルトダウンを起こしていたことが発表されたのは5月下旬のことだ。

○：「御用学者」という言葉がある。著書「国民の天皇」で大佛次郎論壇賞を受賞したケネス・ルオフ教授は「日本人の中にはまだ東大神話をはじめ、大学教授の言うことを無条件に信じる傾向がある。政府予算削減が多くの大学を外部資金調達に走らせ、企業との癒着を増大させている」と、アカデミズムと財界の癒着に注意するよう警告する。

○：同時に、私もそうだが、国際機関という中立で正しいものだと思いがちだが、実態をきちんと見る必要がある。IAEA(国際原子力機関)はノーベル平和賞を受賞したがその任務は原発推進・放射線利用の促進・核拡散阻止のための査察の3分野であり、核軍縮・核廃絶とは無縁だ。「全ての

人々に最高の健康水準を」という目的を掲げたWHO(世界保健機関)も基本は原発推進で、IAEAの承諾なしに「放射線に関わる健康被害」を扱えない協定を結んでいる。WHOの運営資金は加盟国政府からの拠出金で賄われることになっていくが、民間企業からの助成金が急激に拡大し、今では国連予算の倍の資金を私企業から受け取っているという。巨大化した資本の力に、学問だけでなく、国際機関でさえ飲み込まれつつある。IMF(国際通貨基金)も弱い国を救う赤十字のような機関ではなく、地球規模の自由貿易を推進するのが目的で、そのルールはアメリカ中心の西側に有利なようにできている。

○：アメリカではメディア、マスコミも変わった。レーガン政権下の規制緩和でメディアの企業所有が解禁され、大資本によるマスメディアの集中と系列化が進んだ

ことで、ニュース編集の一元化による情報操作が頻繁に起きるようになり、多様な意見が反映されなくなっていく。さらに規制緩和の強化の下、企業は製造拠点を労働賃金の安い海外に移転、労働組合の弱体化で民主党は政治献金のスポンサーを失い、その結果、共和党だけでなく民主党も石油業界やウォール街、製薬会社、軍産複合体やアグリビジネスなどの業界から大口政治献金を受けざるを得なくなった。今やリベラル対保守という二大政党は虚像で、本質は資本独裁国家という一党支配に近いのかもしれない。

○：敵を作る、教育改革、洗脳、マスメディア支配、ネットや通信の監視、等々、巨大資本は世界市場を手中に収めるためにあらゆる手立てを講じる。政府とマスメディアを従えて。一市民として我々は何を考え、何を為すべきか。情報に流されず、嘘か真実か、見極

め、賛成すべきは賛成し、反対すべきは反対の声を上げることが第一歩なのか。

○：もう一冊、コーヒーブレークにオススメ。奥田英朗「向田理髪店」光文社。舞台は北海道の寂れた炭鉱町。勿論フィクションの世界なのだが、財政再建団体となつた夕張市がすぐ頭に浮かぶ。でも舞台は北海道の、あるいは日本各地のどの地方の町も当てはまる。ごく普通の人々の日常と僅かな非日常の出来事が温かい視線で描かれている。最後のエピソードは犯罪を犯してしまったその町の出身者を地元が受け入れる話だが、我が故郷の町でも起きた事柄に共通点があり、更生とか村八分とか、いろいろ考えさせられた。私の好きな作家、なんとなくほのぼのとした気分にしてくれる。